



研究論文 中学生が学級に関して大事に考えている事柄の検討 : 質問紙調査の分析を通じて

著者	内田 沙希, 前田 基成
雑誌名	共生教育学研究
巻	5
ページ	53-60
発行年	2016-05-31
その他のタイトル	Examination of the Matter that Junior High School Students Think to be Important about a Class: Through Analysis of the Inventory Survey
URL	http://hdl.handle.net/2241/00142043

中学生が学級に関して大事に考えている事柄の検討

—質問紙調査の分析を通じて—

内 田 沙 希*

前 田 基 成**

1. 本稿の目的

本稿の目的は、中学生が学級に関して大事に考えている事柄を明らかにすることである。

日本の学級は、生活共同体としての訓育的機能が重視され、学級経営では伝統的に集団づくりが目指されてきた。これまで、学級に関する実践や研究においては、よりよい集団づくりのための方策や、いじめ、不登校、学級崩壊といった学級をめぐる様々な課題を解決するための手段として、学級の状態を把握するための調査が行われてきた。ソシオメトリー（田中熊次郎 1965）や資源概念を用いた調査（西本 2000, 池田・渋谷 2003）、近年では「Q-U（Questionnaire-Utilities）テスト」（河村 2010）といった学級満足度や学校生活意欲、ソーシャルスキルに関する調査などがよく知られている。これらの調査では、主に学級内での人間関係や規律に焦点を当てて、学級を把握しようとしてきた。しかし、基本的に教師や研究者による学級の望ましい状態を前提として、現在の学級がどのような状態にあるのかを検討してきたと考えられ、児童生徒にとっての望ましい学級のあり方について十分に検討してきたとは言いがたい。

早坂（2011）は、「児童生徒は、自己決定に基づく境界によって他のシステム（たとえば教師）と分けられた個性として存在し、その上で自身のもつ知識や経験などを材料にして自律

的に意思決定を行なう存在」であると述べている。だとすれば、児童生徒は学級を創り上げる自律的な構成員であり、教師とは別の認識枠組みで学級を見つめていると考えられる。そのように考えれば、児童生徒自身が学級に関してどのようなことを大事だと認識し、行動しているのかを明らかにすることは重要な課題である。

よって、本稿では、小学生よりも学級をよく観察して行動していると推察される中学生に焦点を当てて、実際に中学生が学級に対してどのような認識を持っているのかについて質問紙調査をもとに分析した。

2. 調査の方法

本調査では、これまでの実践や研究において、望ましい学級の状態として考えられてきた事柄について、人間関係や規律、学習活動や学級活動の機能といった観点から 25 の質問項目（表 1 参照）を作成し、中学校の学級について、それらの事柄が自分にとってどのくらい大事だと感じるのかを 6 件法（「とても大事である」、「大事である」、「やや大事である」、「あまり大事ではない」、「大事ではない」、「まったく大事ではない」）で尋ねた。質問項目を作成するにあたっては、『生徒と学級担任（モノグラフ・中学生の世界 vol.53）』（ベネッセ教育総合研究所 1996）、「学級内での社会性を見取るための児童用自己評価シート」（瀧口 2009）、「縦糸・横糸チェックシート」（野中・後藤 2011）、「学級経営傾向調査シート」（森田・山田 2013）を参考にした。

* 女子美術大学短期大学部

** 女子美術大学芸術学部

表1: 学級に関する事柄についての質問項目

1. 授業が始まる前に多くの人が席についていること
2. 仲の良い友人がいること
3. みんなが困ったときには担任の先生が相談に乗ってくれること
4. 個性的なメンバーが多いこと
5. 一人ひとりが責任を持って当番活動や係り活動をする
6. 行事の準備や練習を担任の先生が積極的に呼びかけること
7. 体育祭や文化祭などの行事にみんなが一致団結して取り組むこと
8. 誰かが失敗しても笑ったり責めたりしないこと
9. 体育祭や文化祭などの行事のときにいろいろな人がリーダーとして活躍すること
10. 朝の会、掃除やお昼の時間、帰りの会などで担任の先生が熱心に指導すること
11. 対立したとしてもそれぞれの意見を出し合えること
12. 自分たちで主体的に学習活動を進めること
13. 当番の仕事や係りの仕事をするときにその他の当番や係りの人も手伝ってくれること
14. 男女分け隔てなく話をする
15. 教室がきれいに整理されていること
16. 気の合ったメンバー同士のグループがあること
17. 授業が静かで落ち着いていること
18. 班やグループなどで協力し合って学習活動に取り組むこと
19. 担任の先生がどの生徒ともいろいろな話をする
20. 誰かが一人きりにならないこと
21. 中心となって引っ張ってってくれるリーダーがいること
22. 問題が起きたときに自分たちで解決すること
23. 担任の先生が生徒から頼られていること
24. ルールや目標をみんなで話し合って決めること
25. 担任の先生以外の先生も相談に乗ってくれること

本調査の対象者は、Y県O市立p中学校の2年生全8学級の生徒である。回答者は、268名で、内訳は男子127名、女子135名、不明6名となっている。調査方法は、学校通しによる質問紙調査として教育委員会に許可を取っていたが、2015年11月に実施した。

本調査を実施するにあたっては、調査対象者のプライバシーや人権を損なうことがないように細心の注意を払った。具体的には、①回答は全て数値化して処理されるため回答者が特定されることはないこと、②回答は自由意思によって行えるものであり、答えたくない場合には回答の必要がないこと、③調査協力校および調査対象者に不利益が生じることがないことを調査協力依頼の際に説明を行うとともに、調査票表紙にもその旨を明記して調査を行った。

3. データの分析

(1) 学級に関する事柄の重要度

はじめに、25の質問項目に関して、それらの

重要度に対する認識がどのような分布になっているのかを明らかにするために、「とても大事である」、「大事である」、「やや大事である」、「あまり大事ではない」、「大事ではない」、「まったく大事ではない」の回答ごとに単純集計を行った。結果は、図1の通りである。なお、重要度を分かりやすく示すために、「とても大事である」の回答が最も多かったものから順にグラフ化した。

全体として、ほとんどの項目について、多くの中学生が「とても大事である」、「大事である」、「やや大事である」と回答しており、これまでの実践や研究において、望ましい学級の状態として認識されてきた事柄は、中学生にとっても重要な事柄として認識されていることが窺える。

しかし、重要度の高さに関しては、それぞれの項目によって認識のされ方に違いが見られる。生徒の半数以上が「とても大事である」と回答した割合の項目に目を向けてみると、「2. 仲の良い友人がいること」(71.8%)、「7. 体育祭や文化祭などの行事にみんなが一致団結して取り組むこと」(64.3%)、「8. 誰かが失敗しても笑ったり責めたりしないこと」(61.6%)、「5. 一人ひとりが責任を持って当番活動や係り活動をする」(54.7%)、「20. 誰かが一人きりにならないこと」(53.0%)、「15. 教室がきれいに整理されていること」(50.6%)が挙げられた。「2. 仲の良い友人がいること」や「8. 誰かが失敗しても笑ったり責めたりしないこと」、「20. 誰かが一人きりにならないこと」といった人間関係のあり方に関する項目と、「7. 体育祭や文化祭などの行事にみんなが一致団結して取り組むこと」や「5. 一人ひとりが責任を持って当番活動や係り活動をする」といった行事や学級での活動における各自の役割や責任に関する項目が「とても大事である」と認識されている。以上から、中学生は、人間関係や、行事や学級での活動における役割や責任のあり方を重要視して、学級を認識している可能性が示唆される。

ただし、人間関係に関して、「16. 気の合ったメンバー同士のグループがあること」(33.6%)や「4. 個性的なメンバーが多いこと」(30.6%)

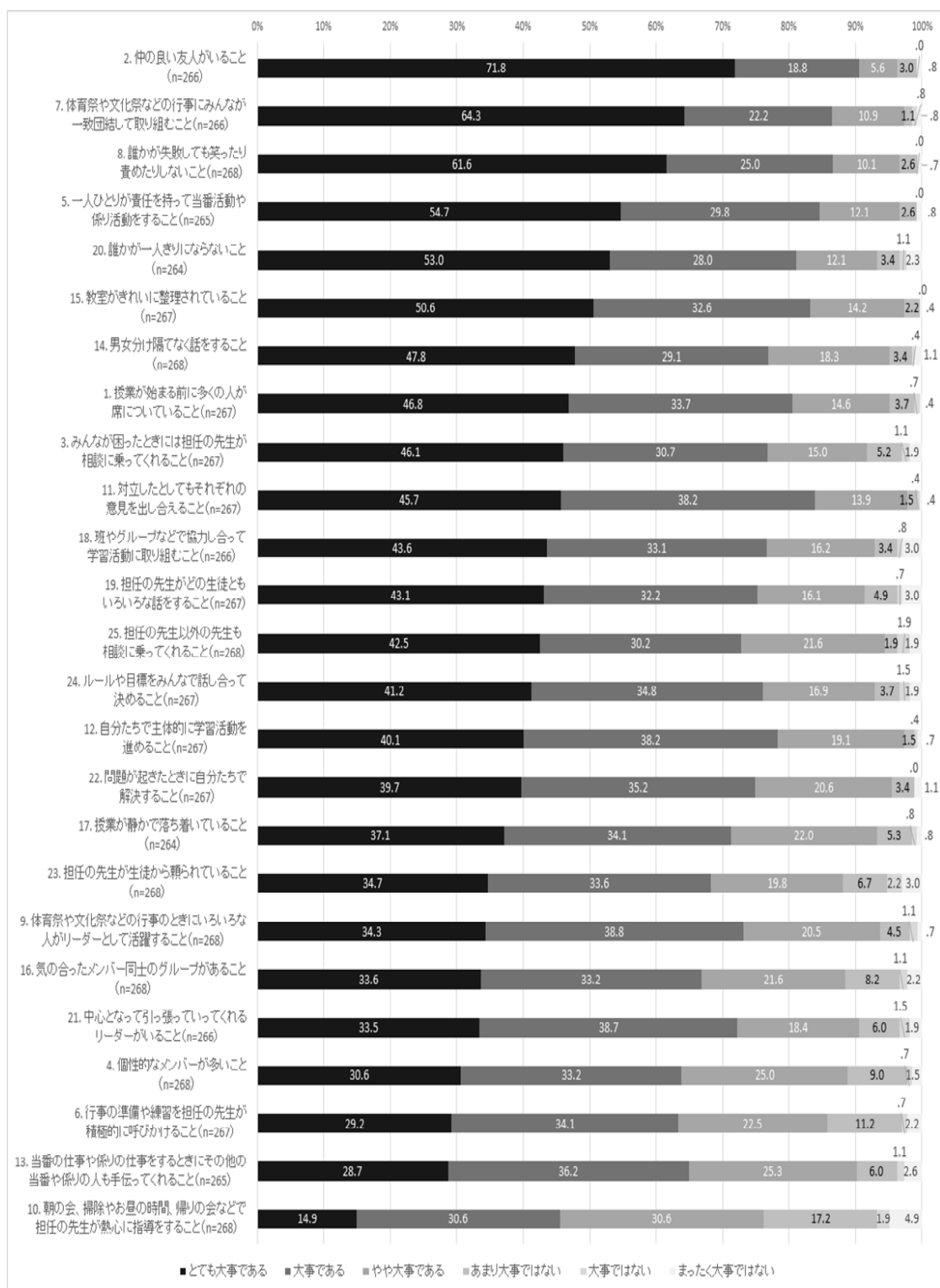


図 1 : 学級に関する事柄の重要度

といった項目については、「とても大事である」と回答している生徒の割合が、他の質問項目に比べ相対的に低い。ここからは、生徒が学級内での集団としての構造的な人間関係や、人間関係を構成するメンバーの多様性よりも、仲の良い友人といった一対一の人間関係や、学級全体として誰かが嫌な思いをすることがないような関係性を重要視していることが考えられる。

また、行事や学級での活動における役割や責任に関して、「13. 当番の仕事や係りの仕事をするとときにその他の当番や係りの人も手伝ってくれること」(26.7%)の項目で、「とても大事である」と回答している生徒の割合が、他の質問項目に比べ相対的に低い。生徒はお互いが協力し合って学級での仕事や役割を進めていくことよりも、お互いが責任を持ってそれぞれの仕事や役割を果たし、行事など学級としてまとまらなくてはならないときにはみんなで関わることを重要視していることが考えられる。

つづいて、「とても大事である」と回答した生徒の割合が最も低い項目に目を向けてみると、「10. 朝の会、掃除やお昼の時間、帰りの会などで担任の先生が熱心に指導をすること」(14.9%)が挙げられた。この項目は、「とても大事である」と回答した生徒の割合が2番目に低い項目である「13. 当番の仕事や係りの仕事をするとときにその他の当番や係りの人も手伝ってくれること」(28.7%)と比較してみても、「とても大事である」と回答した割合がその半分まで大きく下がっている。ここで、学級担任の先生に関わる項目に改めて目を向けてみると、「みんなが困ったときには担任の先生が相談に乗ってくれること」(46.1%)や「19. 担任の先生がどの生徒ともいろいろな話をする事」(43.1%)といった項目は、「とても大事である」と回答した生徒の割合が全項目の中で中間ぐらいに位置するものの、「23. 担任の先生が生徒から頼られていること」(34.7%)や「6. 行事の準備や練習を担当の先生が積極的に呼びかけること」(29.2%)といった項目は、相対的に低い傾向にある。ここからは、学級担任の先生が相談に乗ってくれたり、話をしてくれたりするこ

とと比較すると、行事や学級での活動について指導されることは重要度が低く認識されており、学級担任の先生が生徒に頼られているかどうかについても、相対的に重要度が低い認識傾向にあることが分かる。これらのことを、先の行事や学級での活動における生徒自身の役割や責任の重要度に対する認識と合わせて考えると、生徒は学級での活動について学級担任の先生に指導されるのではなく、より主体的に生徒自身が取り組んでいくことの方がより重要な事柄として認識されていることが示唆される。

(2) 学級に関する事柄の重要度に対する認識の違い

次に、生徒の中での重要度に対する認識の違いを明らかにするために、25の質問項目に関して、「1. とても大事である」、「2. 大事である」、「3. やや大事である」を1、「4. あまり大事ではない」、「5. 大事ではない」、「6. まったく大事ではない」を0として新たな変数を作成し、【大事である】と認識している回答と【大事ではない】と認識している回答とに分けて単純集計を行った。図2は、【大事である】と認識している回答が多い項目から順にグラフ化したものである。

まず、学級に関する事柄の中で、最も多くの生徒が【大事である】との回答を示したのが、「11. 対立したとしてもそれぞれの意見を出し合えること」(97.8%)である。「とても重要である」と回答した生徒は45.7%であったが、「大事である」と「やや大事である」を加えると、ほとんどの生徒にとって重要な事柄であると認識されていることが分かる。対立したとしても、生徒それぞれがお互いの意見を出し合えるような人間関係であることは、生徒が学級に関して考える上で、【大事である】と認識されやすい事柄であることが示唆される。

2番目に多くの生徒が【大事である】との回答を示したのが、「15. 教室がきれいに整理されていること」、「12. 自分たちで主体的に学習活動を進めること」、「7. 体育祭や文化祭などの行事にみんなが一致団結して取り組むこと」(とも

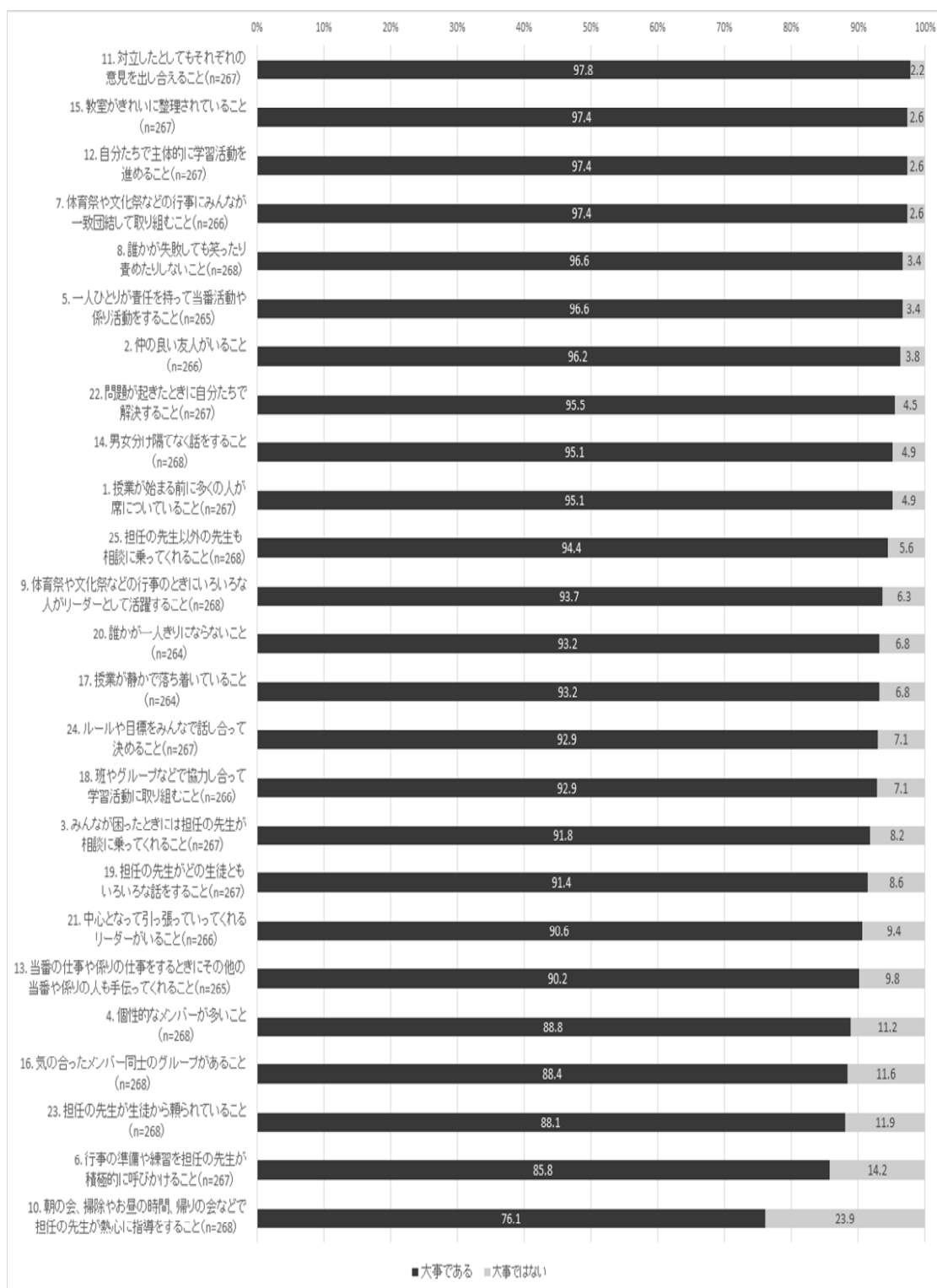


図2：学級に関する事柄の重要度に対する認識の違い

に 97.4%) である。「15. 教室がきれいに整理されていること」と「7. 体育祭や文化祭などの行事にみんなが一致団結して取り組むこと」については、「とても大事である」と回答していた生徒の割合が高かったことと合わせて考えてみても、教室の環境が整っていたり、行事に向けてみんなでまとまることは、生徒の間で【大事である】と認識されやすい事柄であることが窺える。

なお、「12. 自分たちで主体的に学習活動を進めること」については、「とても大事である」と回答している生徒は 40.1%であるが、「大事である」と「やや大事である」を加えると、ほとんどの生徒にとって重要な事柄であると認識されていることが分かる。よって、学級が主体的な学習の場として機能することも、生徒の間で【大事である】と認識されやすい事柄であることが示唆される。なお、主体的ということに関しては、学習面に限らず、問題解決においても比較的多くの生徒に【大事である】と認識されており、そのことは「22. 問題が起きた時に自分たちで解決すること」の回答に現れている。ここでは、「とても大事である」と回答している生徒は 39.7%であるが、【大事である】と認識している生徒は 95.5%にのぼる。よって、中学校の学級に関しては、主体性が重要な事柄として認識されやすい傾向にあることが窺える。

一方で、「2. 仲の良い友人がいること」や「20. 誰かが一人きりにならないこと」といった項目は、「とても大事である」と回答していた生徒の割合は高かったものの、【大事である】との認識を示している生徒の割合としては、相対的に少し順位を下げる傾向にあった。とりわけ、「20. 誰かが一人きりにならないこと」は、【大事ではない】との認識を示している生徒の割合が 6.8%となっている。【大事ではない】との認識を示した生徒の中には、そのように回答した理由として、「好きで一人にいる人もたまにいます、20 の意見の方ばかり重視すると仲良くもない人と一緒にさせられるということになりかねない」との自由記述を寄せてくれた生徒もあり、一人であることが好きな生徒の存在を認めるこ

とや、仲が良くない生徒と無理やり関わるよりは一定の関係を保って関わることを重要視している生徒がいることが窺える。

また、学級担任の先生に関わる項目を見てみると、「10. 朝の会、掃除やお昼の時間、帰りの会などで担任の先生が熱心に指導をすること」(23.9%)を筆頭に、「6. 行事の準備や練習を担任の先生が積極的に呼びかけること」(14.2%)、「23. 担任の先生が生徒から頼られていること」(11.9%)などで、【大事ではない】との認識を示している生徒の割合が他の項目と比較して高いことが示された。よって、学級担任が生徒から頼られているかどうかや、行事や学級での活動について学級担任の先生が指導するかどうかは、生徒の間で重要度の認識に違いが見られやすいと言える。

4. まとめと考察

本稿では、中学校の学級に関して、生徒自身がどのような事柄を大事だと認識しているのかについて検討するために、質問紙調査の分析を行った。その結果、中学生は人間関係や学級での活動における役割や責任といった項目について、高い重要度を認識していることが示された。人間関係については、グループといった集団としての構造的な人間関係よりも、仲の良い友人がいるといった一対一の人間関係や、誰かが嫌な思いをしないといった関係性を重要視していることが示唆された。同時に、学級の中に一人であることが好きな生徒が存在することや、仲が良くない生徒と無理に関わるのではなく、一定の関係で付き合うことに重きを置く生徒も一定数いることが窺えた。

ただし、学級で人と関わるにあたっては、ほとんどの生徒が、対立したとしても、お互いがそれぞれの意見を出し合えるような関係性を重要視する傾向にあることも示され、ここからは単に表面的な関係ではなく、「しんどいこと」もお互いに受け入れて関わっていくことを望んでいることが示された。このことは、現代の子どもたちが「優しい関係」といった言葉で表されるような「極めて注意深く気を遣いあいながら、

できるだけ衝突を避けるようにふるまおうとする傾向」(土井 2005)の中で生きているとの指摘と合わせて考えてみると、現実としての関わり合い方は置いておいたとしても、少なくとも理想としてはもっと生々しい人間関係を大事にしていることが確認できた。

一方で、学級担任の先生に関する事柄については、行事や学級での活動を積極的に指導するといった働きかけに対して、生徒は比較的重要度の低い認識を示していることが分かった。むしろ生徒は、学習活動や学級での問題解決などを、自分たちで主体的に行っていくことの方が大事だとの認識を示しており、学級担任の先生は、困ったときに相談に乗ってくれたり、話をしてくれたりすることの方が生徒にとって重要度が高いことが窺えた。

今回の調査では、1校の生徒のみを対象としたため、中学生全体としての認識傾向と言うことはできないが、以上のような生徒の認識が、生徒が学級で生活する際の認識枠組みとして機能し、物事の捉え方や行動に何らかの影響を与えている可能性が示唆される。

今後は、中学校の学級に対する教員の認識枠組みについても調査を行い、生徒と教員の認識の共通性や齟齬などに焦点を当てて、学級経営のあり方について検討を深めていきたい。

<引用・参考文献>

- 池田曜子・渋谷真樹 (2003)「学級における資源の活用と友人グループ—小学校でのエスノグラフィーを通して—」『教育実践総合センター紀要』Vol.21, 奈良教育学大学教育学部総合実践センター, pp.61-70
- 河村茂雄 (2010)『日本の学級集団と学級経営—集団の教育力を生かす学校システムの原理と展望』図書文化社
- 田中熊次郎 (1965)「学級社会における『社会的共感性』の発達と変容—教育心理学におけるソシオメトリー発展の方向—」『教育心理学研究』Vol.3, No.3, pp.133-45
- 瀧口信晴 (2009)「児童の社会性の育成における評価についての研究」『東京学芸大学教職大

学院課題研究成果報告書(1年履修プログラム)』, pp.51-55

土井隆義 (2005)「かかわりの病理—引きこもりという『自分の地獄』—」井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』有斐閣アルマ, pp.119-226

西本裕輝 (2000)「学級における子どもの資源と地位ヒエラルヒー—D.H.ハーグリーヴスの集団分析枠組の検討を中心に—」『琉球大学教育学部紀要』Vol.56, pp.115-28

野中信行・横藤雅人 (2011)『必ずクラスがまとまる教師の成功術!学級を安定させる縦糸・横糸の関係づくり』学陽書房

早坂淳 (2011)「生徒指導と社会化」石戸教嗣・今井重孝編著『システムとしての教育を探る』勁草書房, pp.118-136

森田純・山田雅彦 (2013)「学級経営に影響を及ぼす教師—児童関係に関する質問紙調査」『教育学研究年報』No.32, pp.23-37

ベネッセ総合教育研究所 (1996)『生徒と学級担任 (モノグラフ・中学生の世界 vol.53)』

* 本研究に関わる調査にご協力いただいたY県O市立p中学校の先生方ならびに生徒の皆様にご感謝申し上げます。

Examination of the Matter that Junior High School Students Think to be Important about a Class: Through Analysis of the Inventory Survey

Saki UCHIDA
Motonari MAEDA

A purpose of this report is to clarify the matter that junior high school students think to be important about a class.

In conventional practice and the precedent study on class, an investigation to grasp the state of the class as means to solve the problem such as bullying and school refusal, the disorder in the classroom has been performed. However, it is thought that these investigations examined a class assuming the desirable state of the class by a teacher and the researcher. Therefore it is hard to say that it has been examined the way of the desirable class for the students enough. Thus, in this study, we performed inventory survey for second graders of the Junior High School. And we considered how 25 items about the class were recognized to be important by students.

As a result, a tendency to regard the items about human relations and the items about a role and the responsibility in an event and the activity in the class as important more was seen in the junior high school students. In addition, the students regarded an item about the independence of will in learning activity and the class activity as important. Therefore the items about a teacher in charge of the class instructing it about an event and class activity positively was shown to tend to have low importance in comparison with other items.